絵画制作のプロセス

The process of my painting

日比野ルミ
Rumi Hibino

花と浮遊する夢（2009） 162×194cm キャンバス アクリル 油彩

美術を学び始めた頃に知った「もの派」周辺の作品には、そのスケールの大きさに圧倒された。素材の物質感に強く反応して、今思えば、表面的にインスタレーションをまねていたのかもしれない。程なく「もの」や「空間」の性質（質）への関心から制作が始まるようになっていった。やがて絵画の面白さに魅せられ、制作もインスタレーションから絵画へ転換してきたが、インスタレーション制作をしていた頃の質に対するこだわりは、絵画制作でも継続していった。絵画制作においては、二次元の世界での「もの」や「空間」の質と、三次元空間での支持体や絵画素材の持つ質の両者が融合して展開する場合がある。私の場合はインスタレーション制作において、三次元空間での素材にこだわってきたために、両方の質について意識的かつ総括的に考えていくようになった。仮に、こだわり続けた質がどちらか片方であったら、現在の私の制作は違ったものになっていただろう。一般的には一方であっても、作品として成立していくものと思われるけれども。

私の制作は、20年程このように展開してきた。この頃感じるのは、ある種の泥くさい展開が美術家の間でも省略される傾向に在るということだ。スマートなプロセスで失う大切なものがあるのではないかという思いが強い。また、大多数が短時間で結果を生み出す方向性に在るのならば、自分はマイノリティであっても、この泥くさく時間をかける創作の先をつくっていきたい。いわば責任感に似た緊張感を持っている。

感触−そこに在ること−（1991）ガラス　水

感触−そこに在ること−（1991） 部分
ガラス 水

水音（2003） 部分
ビニール ガラス 水

Between the two（2000）
美濃紙 麻紐 ガラス 水性絵具

萌芽（2001）
182×175cm
パネル　砥の粉　膠
OGテンペラメディウム
アルミ　アクリルガッシュ

白い花を（2007）
162×130cm
パネル　麻布　膠
アクリル　油彩

私には居心地の良い空間を求める傾向がある。それが何を意味しているのかは解らない。日常空間に不足があるのか、何かの記憶がトラウマとなっているのか、現在の自分が感じているものよりは居心地良くしたいということなのだろう。「ある恍惚感のような」「時間に溶け出していくような」空間への希求は、1980年代から私の制作にあったように思う。2000年頃に自身の制作環境の変化とともに絵画制作に展開していった。絵画での同種の「空気感」への希求が制作の根底にある。地面の質感や光、広がりへの憧憬がもととなって、身のまわりの風景から絞り込み、描く対象（あるいは現象）が定まっていく。初期段階に描く対象は、単なるイメージの元であるだけで最終的なものではない。そのおぼろげなイメージを少しずつ変化させて普遍的なものにしていくことが、私にとって大切なプロセスである。イメージが固まりすぎると感じたら、敢えて壊していくこともある。この段階での振り幅が広いほど作品としての強度が増すような気がしている。昨今は、地面に這うように棲息する草花（多くは雑草）の力強さを美しいと感じる。特に多肉植物とよばれるサボテンに似た植物の形状が興味深い。植物に見られる生命力に魅かれているのかもしれない。植物の姿を見ながら、目に見えないものを追いかけている。見えないものを現す仕事の持続は苦しいが、大変充実した時間でもある。この自虐的な時間を楽しみながら過ごすのが絵画制作の醍醐味ではないかとさえ思う。実際、どのプロセスも省略することなど私には考えられない。初心者が言う「描いて楽しかった」とは違う中身の楽しみ（=苦悩）がここにはある。

多肉植物を見ながらドローイングや、空間（場）を意識したコラージュをつくる。ドローイングは私の場合、水性の絵具類（墨、水性絵具、アクリル絵具など）で紙に描くことが多い。感覚を研ぎ澄まして描いていける下地をつくるために、しみをつくって画面を汚す。それが乾くのを待ち、気になるところを残し、それ以外は再び下地剤で塗り潰す。ある部分が自分の感性に引っかかるかどうかを直感で判断していく。描いて塗り潰すのを繰り返すうちに、下地が出来ている。それゆえ地塗りから描画に変わる瞬間を意識することは、私の場合はない。

一期一会（2009）
65×65cm
キャンバス　アクリル　油彩

偶有の樹（2007）
162×162cm
パネル　麻布　膠
アクリル　油彩

言い方を変えれば、支持体の素材を選んで作り始める時に、既に制作は始まっている。

作品として発表するものは、油彩かアクリル、テンペラ絵具を素材とし、対象の細部は殆どがおぼろげなままである。終わりを決めるのは、いつも本当に難しい。見えないものを見えるようにするなど大それたことを考えているから、そのはじまりでは常套的な決着は見えていない。目指すものがこのあたりに在りそうだぐらいの勘で進めている。マニュアルカメラでピントを合わせるように、行き過ぎを戻して定めるような繊細な判断を迫られる。このとき、目に見えない、ある感覚を表現する過程で自分はとても孤独だ。実際に存在するものの形や空間にとらわれすぎていないか細心の注意を払う。本質に迫っていなければ意味がなく、しかし、何かに引きずられていては別のものになってしまう。見えないものを見えるようにするときには、そのさじ加減が難しい。このことは単に技術的なことに限らない。表現のテーマそのものにも関わっている。

制作の終盤に比較的はっきりとした形が現れ始めたのは最近のことだ。この変化は、自分の思考や姿勢の変化によるものと考えている。それが良いことかどうか判断は難しい。形が具体的になればなるほど既にある何かに引きずられていくリスクを伴う。理想的には、形が美しく定まる直前にプロセスの余韻を残して終わることが出来るとよい。もしくは頂点を極めた（かもしれない）直後に、壊しかけて終わるのが良い。そのタイミングをはかるために数週間かかる事はざらにある。いずれにせよ、自身の制作で理想的な終わりを見たことは未だない。

このように、制作のはじまりも終わりも、はっきり区切られるわけではない。それは詰まるところ、人間が死ぬまで生きているのと似ていて、制作期間中はずっと精神活動が継続する。発表する作品は歴然とした結果（痕跡）であるが、表現の核となる内容は精神活動の道筋にこそあるのではないか。

Drawing（多肉植物）
36×15cm
木　アクリル　鉛筆

Drawing（サルスベリ）
65×53.5cm
パネル　麻布　膠
アクリル　コンテ

Drawing（黒法師）
65×53.5cm
パネル　麻布　膠
墨　アクリル　油彩

くずれゆく花（2009）
194×162cm
キャンバス　アクリル　油彩

こわれゆく花（2009）
194×162cm
キャンバス　アクリル　油彩

日本語の「空間」「時間」「人間」の表記には、どれも「間」の文字が含まれている。私が取り組んできたインスタレーションは「空間」から出発する仕事であり、パフォーマンスや映像作品は「時間」につながる仕事と言える。現在の絵画制作は「空間」への仕事のようでもあり「時間」と向き合う仕事でもある。でも自分としては、人の関係を掘り下げようとしており「人間（じんかん）」を知り、理解する仕事と捉えている。